

伊都郡かつらぎ町

船岡山遺跡発掘調査概要 Ⅲ

1982. 3

和歌山県教育委員会

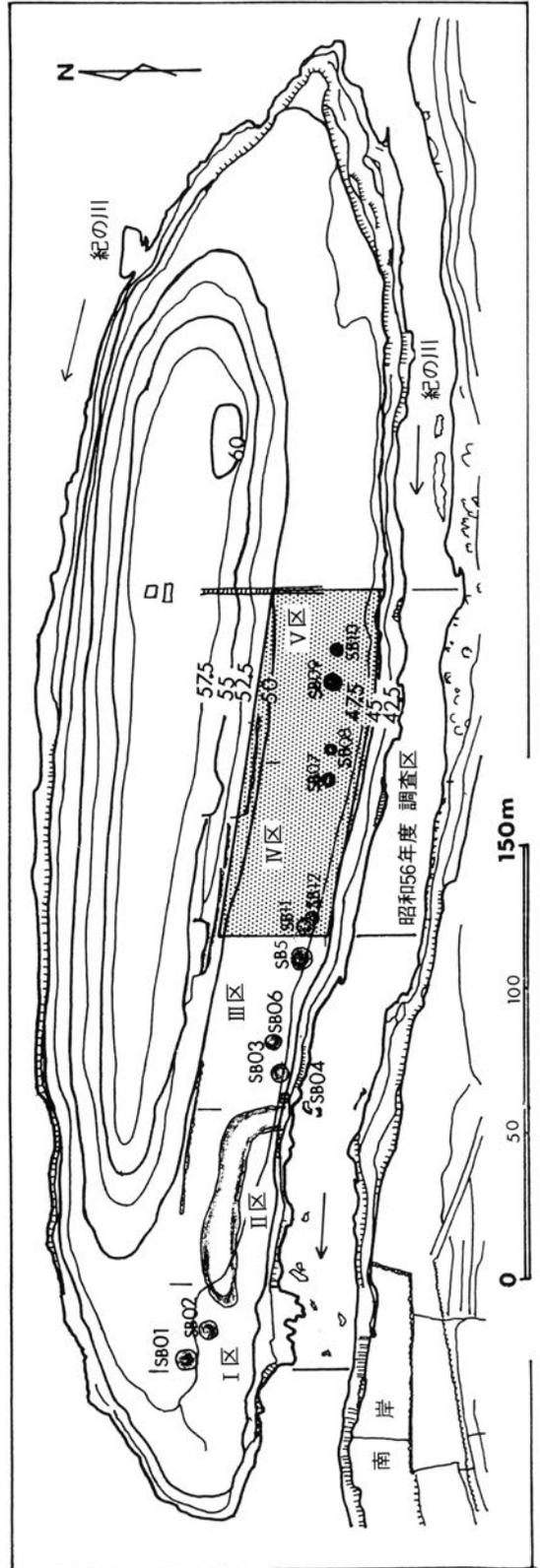
## 例 言

1. 本書は、和歌山県教育委員会が建設省近畿地方建設局より委託を受けて実施した昭和56年度船岡山遺跡発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査に要した経費20,000千円は、すべて建設省近畿地方建設局が負担した。
3. 発掘調査は、和歌山県教育委員会が社団法人和歌山県文化財研究会に委託して実施し、現場調査は、和歌山県文化財保護審議会 羯磨正信、巽三郎、都出比呂志、藤澤一夫の各委員の指導を受け、和歌山県教育委員会文化財課技師松田正昭、社団法人和歌山県文化財研究会技術員土井孝之が担当した。
4. 調査にあたり、奈良国立文化財研究所菅原正明技官、奈良大学文学部助教授水野正好、帝塚山短期大学助教授田代克己の各氏からは、現地において助言を得た。
5. 出土遺物の整理、写真撮影、図面作成にあたって前田弥榮子、中村憲代、山本秀樹、窪田雅秀、木村清志らの協力を得た。
6. 本書の作成について、和歌山県文化財保護審議委員の指導および、和歌山県教育委員会文化財課技師、社団法人和歌山県文化財研究会技術員、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館技師諸氏の助言を得て、土井が執筆、編集した。

# 目次

序文  
例言

1. 遺跡の位置 .....	1
2. 調査範囲 .....	1
3. 調査の概要 .....	1
4. 弥生時代 .....	2
(1) 竪穴住居跡 .....	2
(2) 土 壙 .....	4
(3) 出土遺物 .....	4
5. 中・近世 .....	7
(1) 遺 構 .....	7
(2) 出土遺物 .....	8
6. その他の遺構・遺物 .....	9
7. ま と め .....	9



第1図 船岡山遺跡全体図

## 1. 遺跡の位置 (第10図)

船岡山遺跡<sup>(29)</sup>は、伊都郡かつらぎ町大字島字船岡山に所在する。紀の川水系および吉野川水系の弥生時代遺跡の在り方は、概報Ⅱで記した諸遺跡を含め密集あるいは散在している。その中で紀の川河口域には和歌山市太田・黒田遺跡<sup>(7)</sup>、宇田森遺跡<sup>(23)</sup>、北田井遺跡<sup>(22)</sup>、岩出町吉田遺跡<sup>(24)</sup>などを中軸とする地域、中流域には岩出町岡田遺跡<sup>(25)</sup>、かつらぎ町佐野遺跡<sup>(31)</sup>、橋本市垂井遺跡<sup>(35)</sup>などを中軸とする地域が散在する。吉野川水系には五条市中遺跡<sup>(38)</sup>、吉野町宮滝遺跡<sup>(41)</sup>などを中軸とする地域が展開する。このような遺跡の在り方の中で、船岡山遺跡は佐野遺跡<sup>(31)</sup>、萩原遺跡<sup>(30)</sup>などを中軸とする地域に含まれ、紀の川中流域の立地的にも重要な位置を占めている。また近隣のかつらぎ町渋田遺跡、那賀町中遺跡なども同一の地域として捉える事ができる。

## 2. 調査範囲 (第1図)

本年度の調査範囲は、昭和55年度の発掘調査区(第Ⅰ～Ⅲ区)に続き、島域の中央部約4,000㎡を対象として行った。調査区は昨年度に続きW120～60ランイを第Ⅳ区、W60～EWOを第Ⅴ区とした。また紀の川を挟んで島の南西側に位置する水田、畑地約4,000㎡を対象として、トレンチによる試掘調査を実施した。

## 3. 調査の概要

調査の結果、縄文時代後期の生活面、弥生時代後期前半の円形竪穴住居跡6棟、土壇群、溝状遺構、ピット群、方形竪穴住居跡2棟、中世以後の土壇群、ピット群等を検出した。

縄文時代——第Ⅳ・Ⅴ区の調査範囲に約1×0.5mの試掘壙をほぼ等間隔に54ヶ所設定し、遺物包含層、生活面の確認を行った。その結果、調査区の南縁幅約10m、延長約120m間にわたり、遺物包含層の存在が明らかになった。包含層はさらにⅤ区の東側に広がるものと予測される。

弥生時代——遺構として、円形竪穴住居跡6棟、掘立柱建物跡1棟、ピット列、ピット群、土壇群、焼土壇などを検出した。その他に方形竪穴住居跡2棟を検出した。

中・近世——遺構として、昭和55年度において検出した同類の焼土壇、炭土壇を含めた土壇群、掘立柱建物跡、不規則な在り方をみせるピット群などを検出した。また、SB09の埋没過程において生じた上部の落込み状地形からは一括した土師器が多量に出土している。

南岸試掘調査——船岡山遺跡(島)の南西対岸に、現在は水田・畑地として利用されている約4,000㎡の平坦地が存在する。これらの範囲は島域の縁辺部とほぼ同レベルになるため、いくつかの問題点を予測した。その内、島域との関連で島地形がいつ頃形成されたのか、形成時期が弥生時代以後であれば第Ⅲ区で検出した落込み状地形の延長部分ないしは弥生時代の遺構・遺物の検出が期待できるものと考えられ、試掘調査の運びとなった。調査は、幅3m、長さ20m(南北の場合は5～7mとなる)のトレンチを計13本設定して行った。層序は、耕土・床土・灰褐色粘質

土（中・近世遺物包含層）・以下地山となる。地山面において幅0.6～3 m、延長約90m、深さ0.2 mの溝状遺構を検出したにとどまり、予測とは大きく異なる結果となった。

## 4. 弥生時代

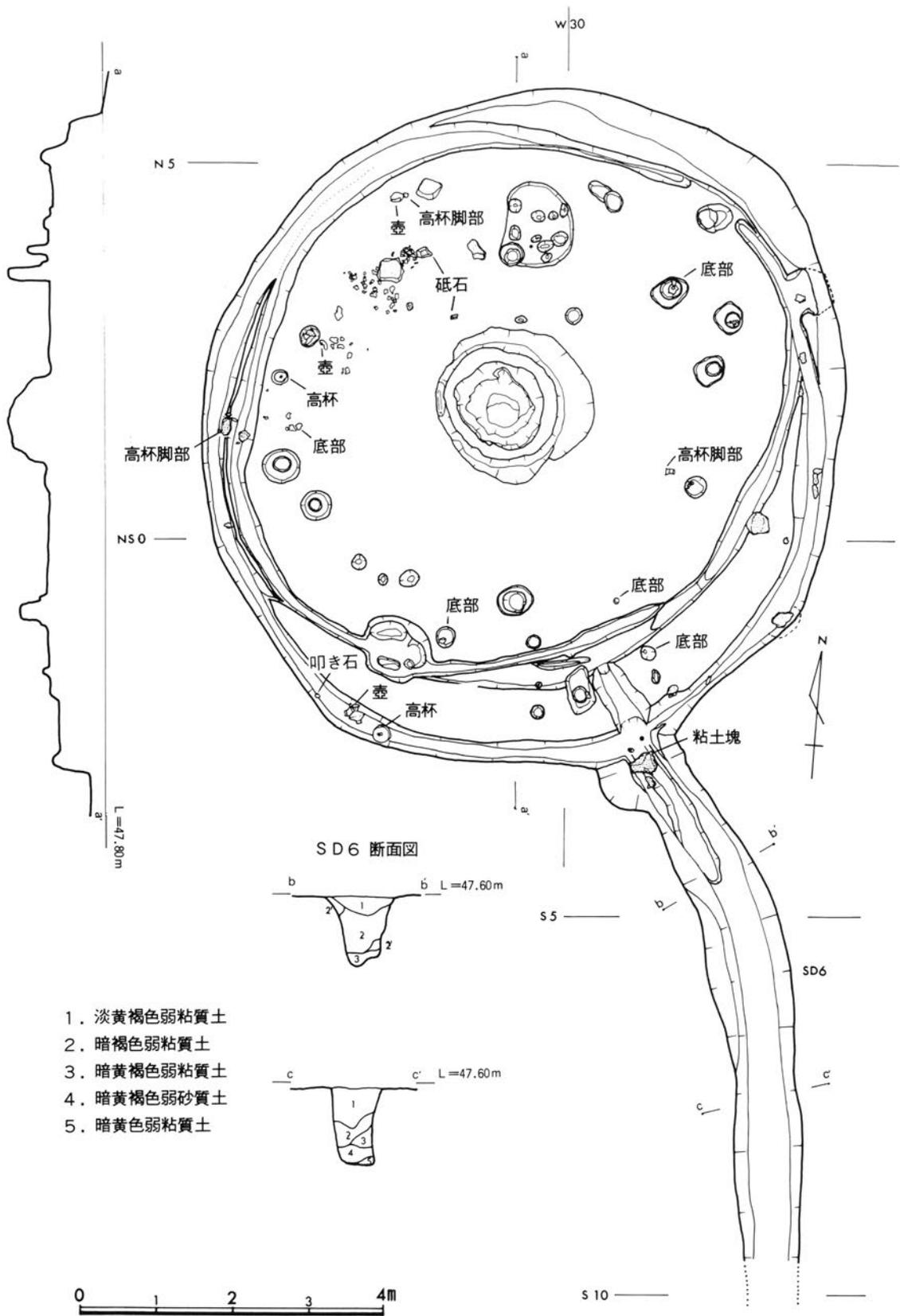
### (1) 竪穴住居跡（図版1～6）

第Ⅳ区で3棟、第Ⅴ区で3棟、計6棟の円形竪穴住居跡を検出した。各々、S B07～S B12と呼称する。調査区の西端から住居跡の位置関係、概要を列記すると以下の通りである。S B11は第Ⅳ区の西南端に位置する直径約7.7mの住居跡である。S B12は北西隅をS B11に切られ、昨年度調査のS B05から約8 m東側に位置する長径6.3m、短径6 mと拡張が認められる住居跡である。S B07は第Ⅳ区の南東端にあって、S B12から約20m東側に位置する直径6.1 mを測る住居跡である。S B08は第Ⅴ区の南西端にあって、S B07から約7 m東側に位置する長径6.8m、短径6.5 mを測る住居跡である。S B09は第Ⅴ区の中央にあって、S B08から約15m東側に位置する長径9.1m、短径8.5mを測る拡張が認められる住居跡である。S B10はS B09から約4 m東側に位置する長径6.8m、短径6.2mを測る住居跡である。これらの住居跡は昨年度調査の円形住居跡と同様の形態を示し、壁際の全周もしくは一部を除いて壁溝が巡り、支柱穴が4本のもの（S B07・S B08・S B10・S B12）と、8本のもの（S B09・S B11）がある。床面の中央には炉が設けられ、S B07を除く炉の周囲には炉堤が巡らされている。床面は6棟とも堅く踏みしめられた状態である。床面直上の出土遺物によって6棟の円形住居跡は弥生時代後期前半のものである。

#### S B09（第2図、図版2—(2)）

S B09の拡張以前の規模は、長径8.8m、短径7.5mを測る円形の住居跡である。壁高は拡張後の住居掘削のため明確にしがたいが、拡張後の床面との段差は南半で約10cm低い床面となる。北東隅の約0.8mの間を除く壁際に沿って幅20～35cm、深さ5～10cmの壁溝が巡る。床面の中央には直径約1.1m、深さ約0.5mの炉があり、炉内堆積土の状況からみて、拡張後の住居跡においても継続して使用されていた施設である。また、炉の周囲には幅約15～20cmの炉堤が巡り、その外円に幅約10～45cm、深さ約5 cmの浅いくぼみを巡らしている。支柱穴は8本でいずれも直径約25～50cm、深さ約30～60cmの掘り方をもち、直径約20cmの柱当りをもつものである。支柱穴の中には、柱の真芯の下に根石を入れる例（図版6—②）も認められる。壁溝の南縁より外へ延びる溝状遺構の痕跡が認められる。

拡張後のS B09の規模は、長径9.1m、短径8.5mを測る円形の住居跡である。壁高は北側で約80cm、南側で約50cmを測る。北東壁は約50cmまでほぼ垂直に立ち上がり、それ以上は緩やかに外方へ広がっていく。北側では約4 mの範囲にわたり、最大幅約40cmのテラスを形成している。壁際に沿って幅約20～30cm、深さ約10cmの壁溝が巡らされている。床面の南半域において、旧住居跡の床面に10cm程度の貼り床を施しているが、他の住居跡の床面にみられるように堅く踏みしめ



第 2 图 SB09 平面实测图

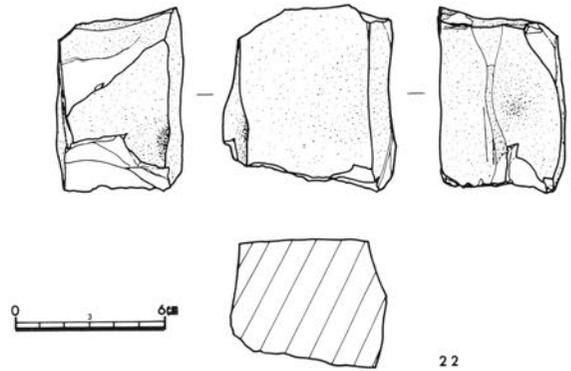
られた痕跡が認められない。床面からは砥石2点と共に弥生土器が多量に出土しており、特に床面の北西域に集中する傾向がみられる。また、住居跡堆積土の下層、S B 09に伴うS D 6などからは多数の土製紡錘車が出土している。

## (2) 土 壤

今回、検出した土壌は形状、遺物の出土状況などから分類すると、①平面形が隋円形を呈し、遺物が僅少のもの（S K 175、S K 187、S K 536）、②平面形が円形を呈し、土器が完形品で出土するもの（S K 165）、③平面形が長方形を呈し、土器がまとまって出土するもの（S K 634、S K 635）、④平面形が不定形を呈し、堆積土に焼土が混在しているもの（S K 627）、⑤その他に分類することができる。これらの内、S K 165からは長頸壺、高杯脚部、脚台部が到立した状態で重なって出土している。また、長方形を呈するS K 634は、長軸3.84m、短軸0.68m、深さ0.08mを測り、少なくとも広口壺2点以上が折り重なった状態で出土している。平面形が長方形を呈する土壌の中には出土遺物のないものも存在する（S K 632、S K 633）。

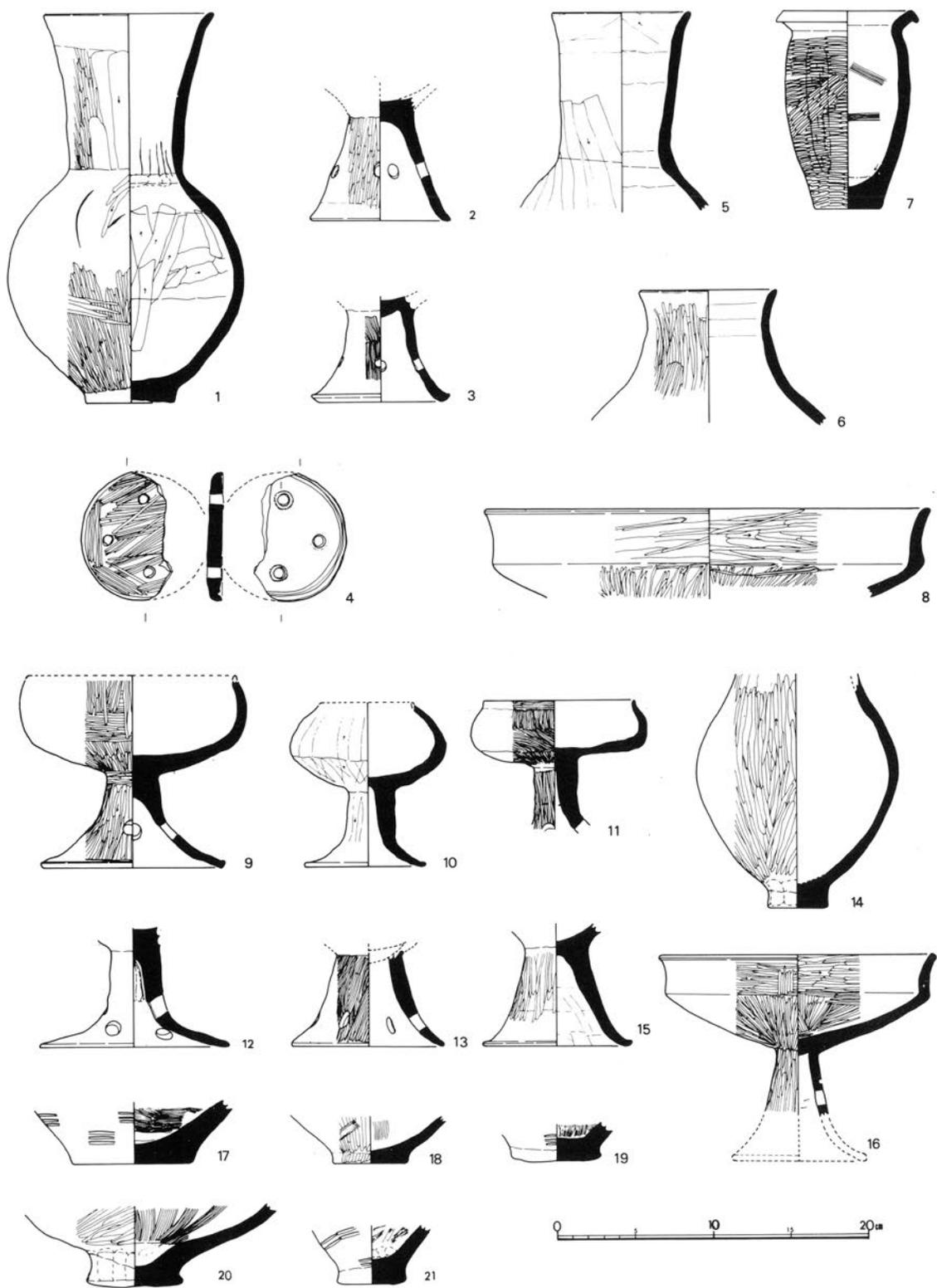
(3) 出土遺物 (第3図～6図) 遺構、覆土名の後には図中の遺物番号を記入している。

S B 07 (9～13) 一杯部が碗形を呈する高杯ないしは脚台部に限られる。9は淡黄褐色を呈し、外面は丁寧な篋磨きで内面は横方向の撫でを施す。10は暗黄灰色を呈し、外面は細く丁寧な篋磨きを施すが、砂粒の移動が目立つ。11は赤褐色を呈し、外面は細く特に丁寧な篋磨きを施す。9～11の胎土は緻密。12・13は明茶褐色～濃茶色を呈し、胎土はやや粗いが砂粒をほとんど含まない。12の穿孔は上段に2孔、下段に4孔となり、13では6孔となる。このようにS B 07からは丁寧な調整を施す限られた器種のみが出土した。S B 09 (14～22・24) 一他の住居跡に比して遺物量・器種共に豊富である。14は淡黄褐色を呈し、胎土はS



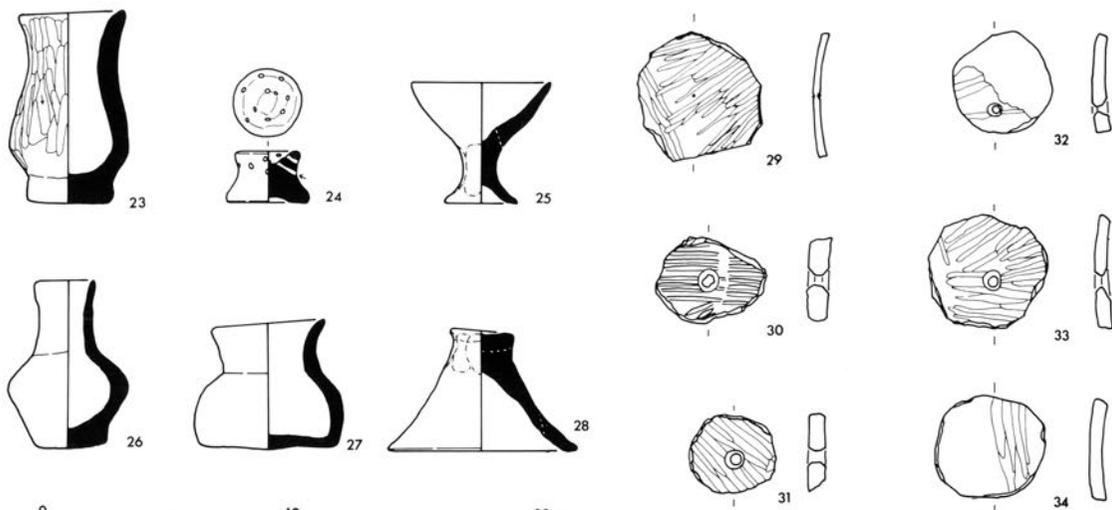
第3図 S B 09出土砥石実測図

B 07の12・13に類似する。外面に幅の広い丁寧な篋磨きを施し、下半部は粗く撫でつけている。15は淡茶褐色を呈し、胎土はやや緻密で、内面下半部は筋目のつく横方向の撫でを施す。16は暗黄褐色～暗茶褐色を呈し、胎土は極めて緻密。内外面共に丁寧な篋磨きを施し、脚台部内面は篋削り状に砂粒の移動が認められる。17～21の底部は淡黄褐色を呈し、胎土はやや緻密。内面は刷毛目状の整形を施す。24は淡茶褐色を呈する鼓形のミニチュア土器である。外面から斜めに2段の穿孔が計10孔施される。22は淡黄灰色を呈する凝灰岩質の石材を使用している。6面の内、5面に明瞭な使用痕が認められる。その他、S B 09からは小形の広口壺、脚台付細頸壺、高杯7点、



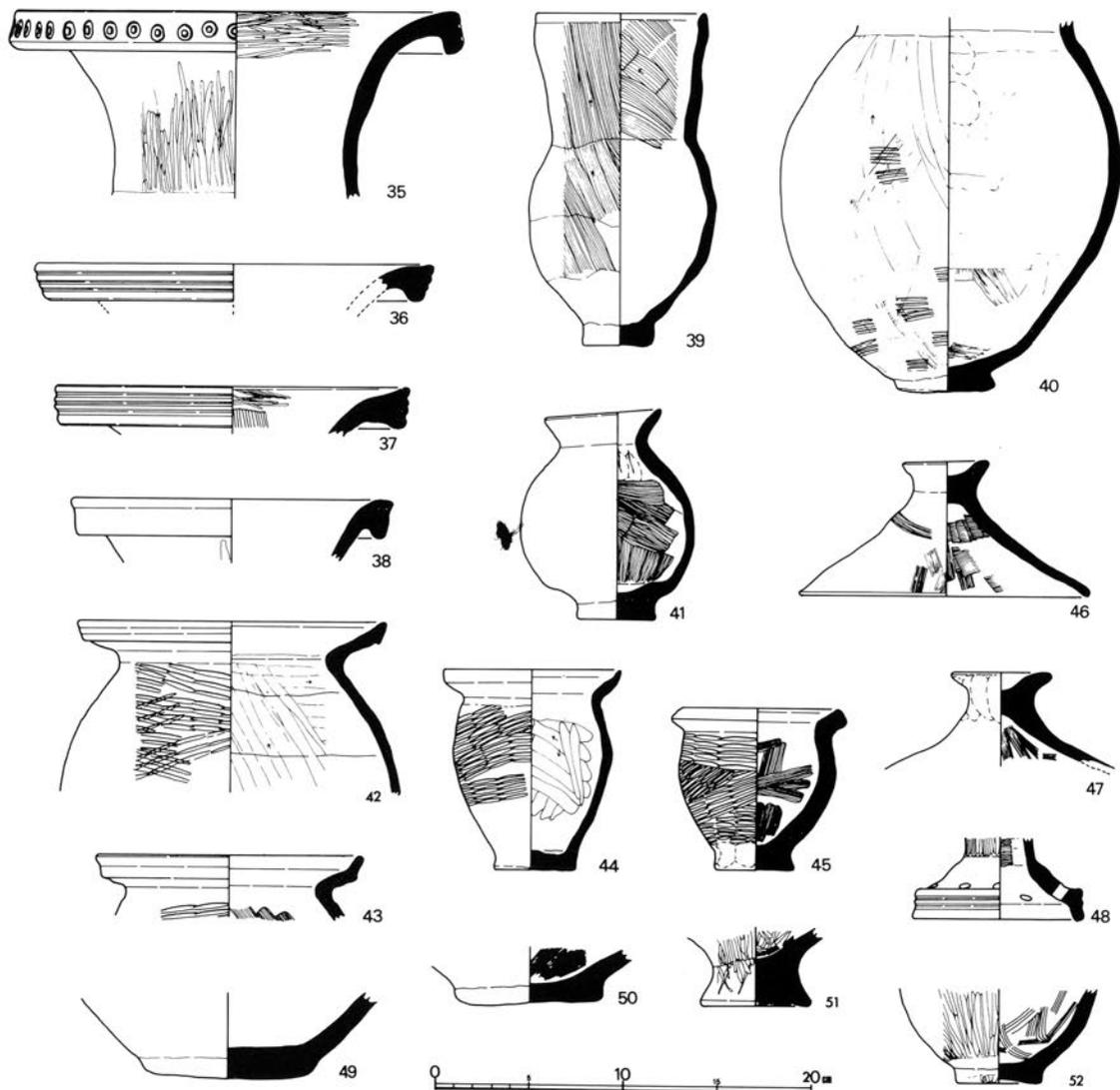
SK165-1~3、SK232-4、SB10-5~8、SB07-9~13、SB09-14~21

第 4 图 遺構出土遺物実測図



SK 235-25、SB 09-24、SB 10覆土-28、SB 09覆土-32~34、SD 6覆土-29~31、淡灰黄褐色弱粘質土-23、黄色弱砂質土-26、27

第5图 弥生时代出土遺物実測図



35-黄色弱砂質土、36.38.42.48.49-淡黄褐色弱粘質土、37-淡黄褐色粘質土、39-明黄色弱粘質土、40.43.44.47.50-黑褐色小礫混入土、41.52-SB 10覆土、45-SB 09覆土、46.51-SD 6覆土

第6图 包含層出土遺物実測図2

叩き石、砂岩質の砥石などが出土している。

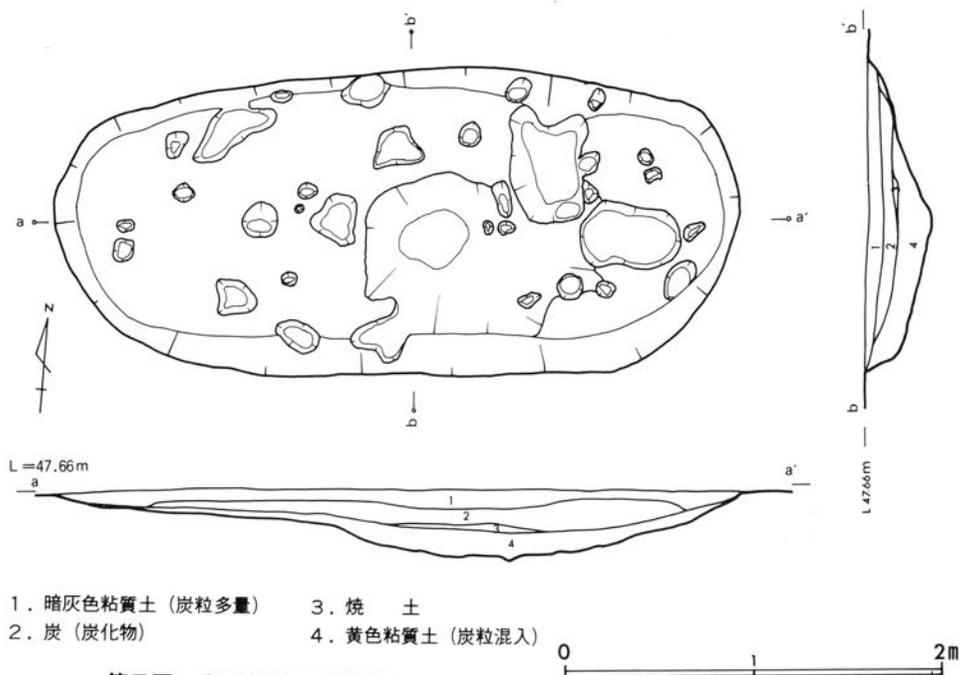
**S B 10** (5~8) - 5・6は淡茶褐色~淡黄褐色を呈し、胎土はやや緻密。共に口縁部内外面は筋目のつく横方向の撫でを施す。7は淡黄褐色を呈し、胎土はやや緻密で砂粒をまばらに含む。外面は叩き目を施した後、軽い篋削りを施している。**S K 165** (1~3) - 1は淡黄褐色を呈し、胎土は緻密。外面はやや粗い篋磨きで、胴部上位に篋記号がつけられる。2・3の穿孔は共に5孔である。

概略的に遺構出土遺物を羅列してみた。中には分類作業に有効な型式差の認められるものが多分にある。そのため、今後の整理作業において縦横の關係に注意を注がねばならない。

## 5. 中・近世

### (1) 遺 構

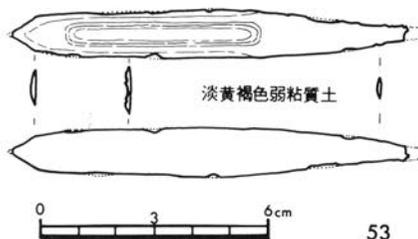
今回、検出した土壌の中には概報Ⅱで分類した①②類は全く検出されなかった。今回検出のものには、③焼土粒(塊)を多量に含む土壌(S K 535、S K 220)、④平面形は長隋円形を呈し、基底部まで小礫をつめ込んだ土壌(S K 221~223、S K 225)、大形で、炭層と焼土層で形成されている土壌(S K 219、197、198、543、544)などの前年度と同様の土壌が散在するものである。S K 549の平面形は長軸1.1m、短軸0.7mの隋円形を呈し、深さは中心部で約0.65mを測り柱穴の可能性はある。出土遺物として黒色の小碗が約20点出土しており、検出状況より土壌に一括廃棄されたものであろう。他の遺構、包含層からの同類の土器の出土は皆無である。またS K 549 検



出面において寛永通宝6点(図版6-(2)-②)、銅製筭が検出されたことからS K 549はこれら(第8図)の遺物と近時した時期のものと考えられる。

S B09の上部の落込み状地形に堆積した黒色弱粘質土層からは、多量の土師器皿が極めて限られた範囲において出土している。

S K 544の平面形は長軸3.6m、短軸1.7m、深さ0.35cmを測る隋円形の土壌である。土壌の覆土は4層からなり、第1層と第4層は炭粒、焼土粒の多い黄褐色土、第2層が厚さ約10~20cmの炭層、第3層で厚さ約5cmの焼土層となる。土壌の基底部分は凹凸が著しい。炭、焼土層はS K 544を含み同類の土壌(S K 197、198、544など)の機能に係わるものである。出土遺物として炭層より瓦器碗の小片が1点出土しているのみである。

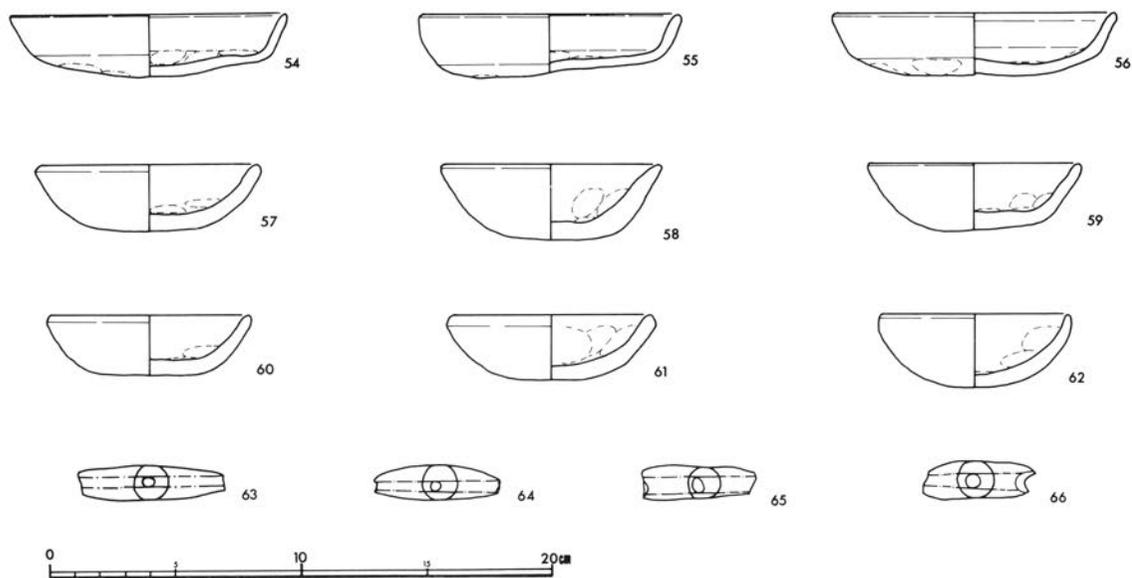


第8図 包含層出土 筭実測図

## (2) 出土遺物 (第8・9図)

S K 549出土の黒色の小椀——ほとんどが口径8cm内外、器高2.5~3cmにおさまり、全て指頭圧痕と軽いタッチのナデによる整形である。色調は内外面共に黒色を呈し、胎土はやや粗く1mm大の小砂粒を多量に含む。形態は、底部にせまい面をもち、底部から口縁部へと緩やかに外傾し口縁端部は厚く丸みをもつ。  
(図版14-57~59)

S B09上部落込み状地形出土の土師器皿——ほとんどが口径12cm内外、器高2.5cm内外におさまる。すべて底部の内外面は指頭圧痕、口縁の立ち上り部分は横方向の強いナデが認められる。  
(図版14-54~56)



S K 549-57~62、黒色弱粘質土-54~56、淡黄褐色弱粘質土-63~66

第9図 中・近世出土遺物実測図

色調は灰黄色を呈し、胎土はやや堅緻で小砂粒は少量である。これらの土師器に伴って、羽釜片1点が出土している。

その他、中・近世の遺物として、陶磁器、寛永通宝、土錘、砥石、鉄鏃、銅製筭などが出土している。  
(図版14-63-66) (図版14-53)

## 6. その他の遺構・遺物

ピット群——調査区の中でピットの集中する範囲を8群に分けて考えることができる。各々のピットの形状は、直径約20～30cm、深さ約30～60cmのものが大部分で、覆土は黒色土（ピット1・6群）、および黄褐色土（ピット2～5群）となる。掘り方については大部分が不明である。これらのピット群の内、遺構一覧表に記したようにピット1、5～8群は掘立柱建物跡、ピット3・4群は柵列が考えられる。その他ピット2群は散在するのみである。時期等については、限られたピットの黒色土中より瓦器碗小片が出土し、黄褐色土中からは弥生土器が稀れに出土するのみで判然としない。

S K 183——一辺約3.6m、幅約0.8m、深さ0.4mの溝が方形にまわる遺構で、覆土は黒色小礫混入土となり遺物は検出できなかった。

S K 184——S K 183を切る遺構で、覆土の状況はS K 183と同様である。

S D 11——延長約20m、幅約0.2～0.3m、深さ0.1mを測り、緩傾斜面の南側に向けて「字状に折れ曲がる溝状遺構である。覆土は黒色弱砂質土となり、一部で瓦器碗の伴う時期の土壌に切られている。

尚、S K 183北側の調査区北壁断面において、幅約1m、深さ約1.2mのV字状の落ちが認められる。堆積土の状況からV字溝の可能性が強く、北傾斜面に延びるものと考えられる。

当項で詳述できなかった遺構を含め、遺跡全体の上面で検出した遺構について、検出面が北へ向って高くなる傾斜地面であることから、中・近世の包含層がない状態で、すでに弥生時代の遺構が現れている範囲がある。また、弥生時代以降の凹凸の著しい面に弥生時代遺物包含層の二次堆積が考えられるものもある。そのため、弥生土器の出土が即弥生時代の遺構と決定するには危険が伴う。概報に付した遺構一覧表を参照にされたい。

## 7. ま と め

縄文時代——今次の調査では、縄文時代後期の土器・石器を中心とした遺物包含層と生活面と認められる範囲を推定したにとどまる。次年度の調査において遺構の有無、集落としての機能を持ちうるものかどうか具体的な資料の検出を待ってまともに望みたい。

弥生時代——円形住居跡は前年度の調査分を合せて計11棟となり、各々の住居跡の間隔から2棟毎のまとまりをみせる。調査区の西端から2棟を追っていくとS B 01とS B 02、S B 03とS B 06、

S B05とS B12、S B07とS B08、S B09とS B10という順に整った配置が5組認められる。このような単位による集落構成を明確にした例としては、全国でも類例のないものである。2棟1単位の構成が5単位認められた事で、各々の住居跡の拡張・改築に照し合せた出土遺物の詳細な検討が必須なことは言うまでもない。また、遺跡の立地、遺跡の性格、出土遺物の共伴関係等において、他の弥生時代後期の遺跡群と比較して特殊性が抽出できうるものであれば、より有効的な集落の展開が可能になるものと確信している。その他、現段階ではS B11に伴う住居跡はなくS B05、S B12の2棟の廃絶後間もない時期にS B11が設けられたものであり、今次の調査で検出した2棟の方形住居跡との設営関係が重視されるものである。

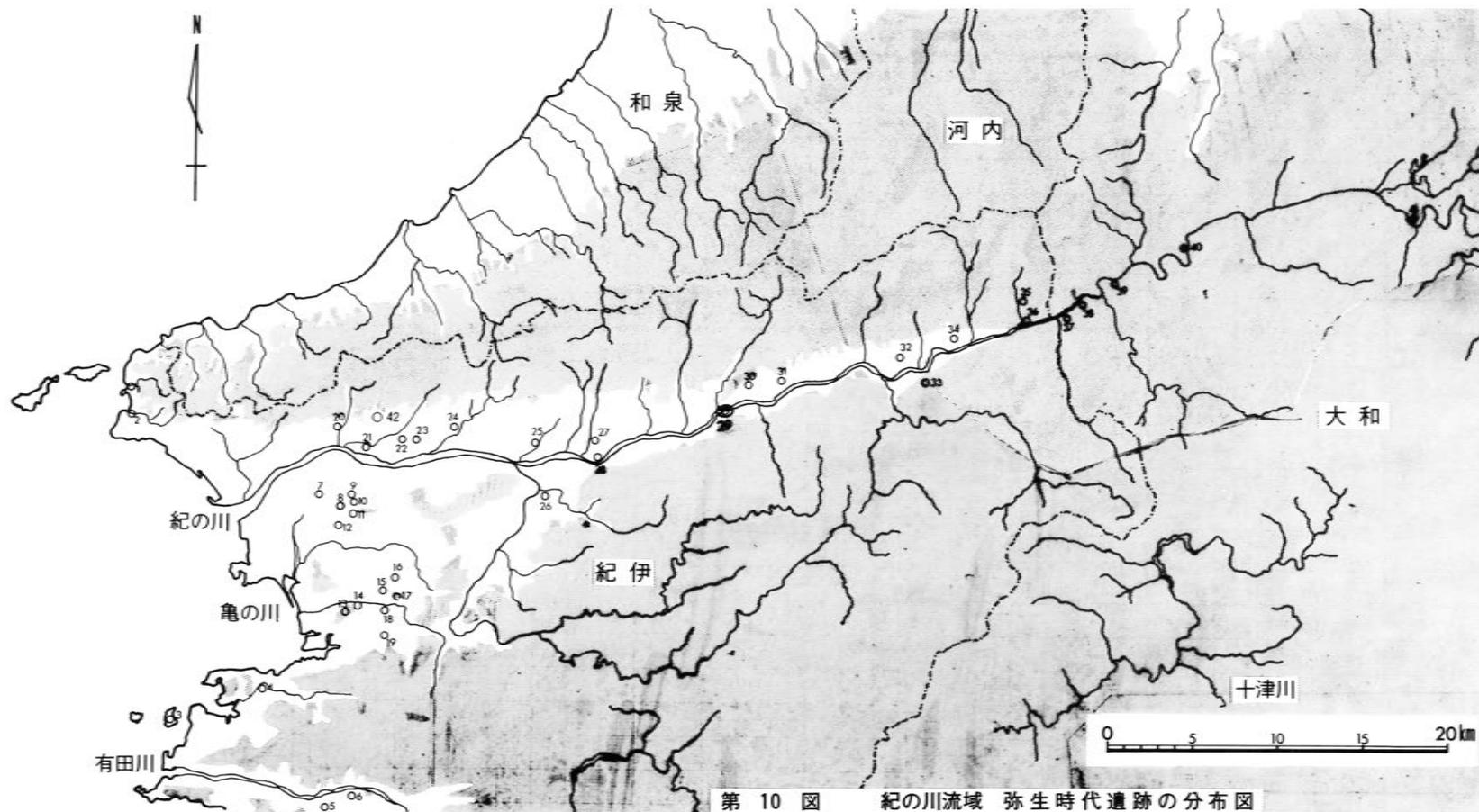
古墳時代—今次の調査では、弥生土器が多量に出土している黒色小礫混入土層から須恵器の甕腹部が1片出土したのみで、弥生時代から古墳時代へと連続していく過渡期の物証はなんら検出できなかった。

中・近世—これらの時期に伴う遺物が少なく、検出遺構の時期決定に難点を生み出している。その中で、僅かな出土遺物の得られた掘立柱建物跡、土壇などがある。当項で扱った遺構は断続して近世に至るなかで、鎌倉時代後半に第Ⅱ区を中心として土壇墓が造られる。その後、第Ⅲ区第Ⅳ区を中心に③類、④類の土壇が造られ、W110～W130を中心に第Ⅴ区の範囲まで⑤類の土壇が造られる。③～⑤類の土壇が造られた時期は室町時代前半以降と推定される。室町時代半ばになると、SB09の上部落込み状地形に多量の土師器皿が投棄され、江戸時代になると島の頂上に鎮座する厳島神社に係る時期の遺物がみられるようになる。このように断片的な考古資料がみられる時代を経て、現在の厳島神社が鎮座し、周辺は畑地として利用されるに至っている。

次年度には第Ⅴ区の東側に続く緩傾斜面約1,400㎡、縄文時代の生活面、南対岸の調査が継続して行なわれる予定である。

#### 既刊の調査概要

『船岡山遺跡発掘調査概要』	1980年	和歌山県教育委員会
『伊都郡かつらぎ町所在船岡山遺跡発掘調査概要Ⅱ』	1981年	〃 〃



第 10 図 紀の川流域 弥生時代遺跡の分布図

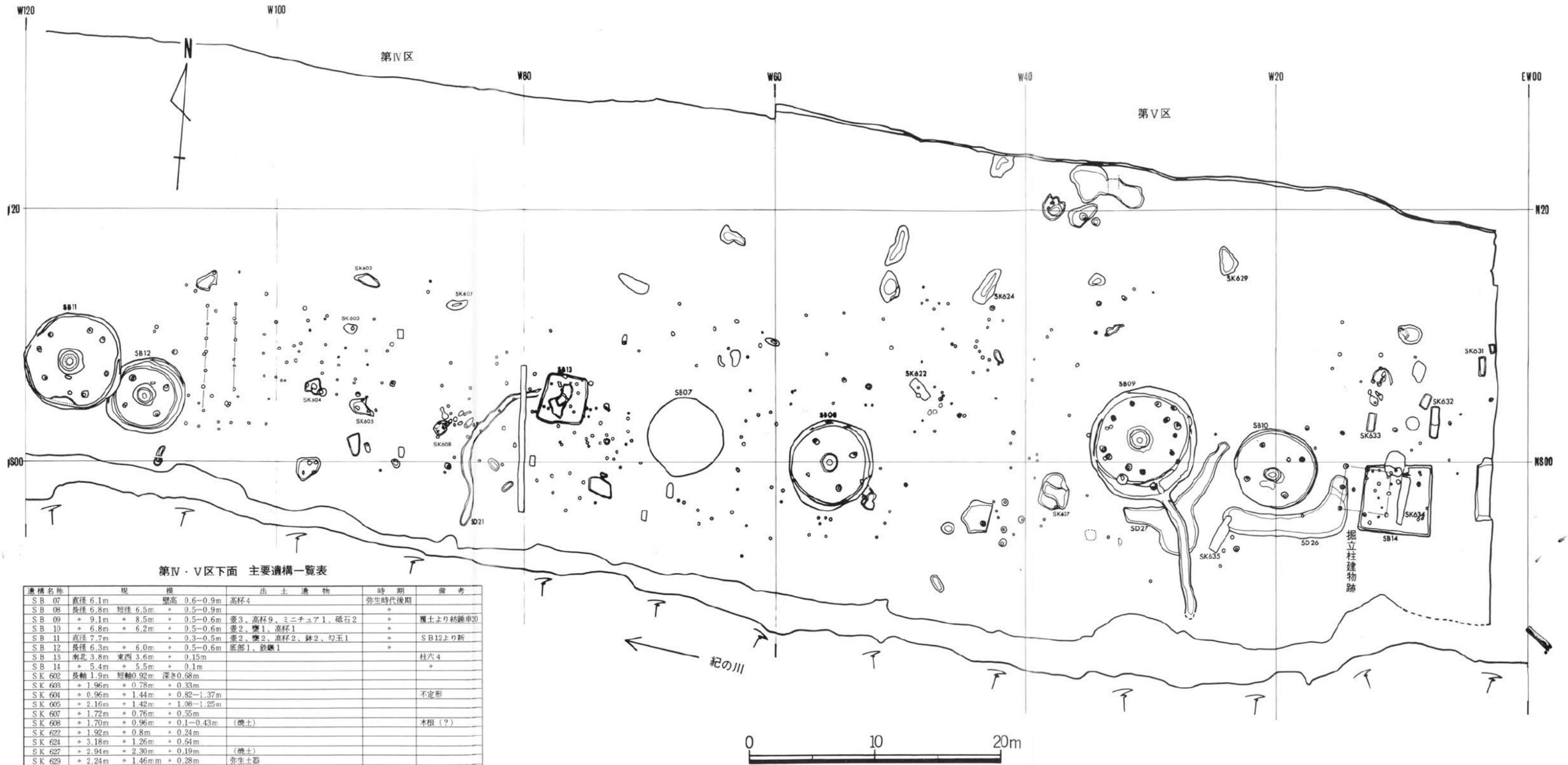
- |            |            |           |           |             |            |          |
|------------|------------|-----------|-----------|-------------|------------|----------|
| 1. しょうぶ谷遺跡 | 7. 太田・黒田遺跡 | 13. 山崎山遺跡 | 19. 大野中遺跡 | 25. 岡田遺跡    | 31. 佐野遺跡   | 37. 火打遺跡 |
| 2. 大谷川遺跡   | 8. 秋月遺跡    | 14. 岡村遺跡  | 20. 六十谷遺跡 | 26. 城の段遺跡   | 32. 竹之鼻遺跡  | 38. 中野遺跡 |
| 3. 地の島遺跡   | 9. 鳴神遺跡    | 15. 薬勝寺遺跡 | 21. 田屋遺跡  | 27. 東田中神社遺跡 | 33. 学文路Ⅲ遺跡 | 39. 野原遺跡 |
| 4. 下遺跡     | 10. 鳴神貝塚   | 16. 千石山遺跡 | 22. 北田井遺跡 | 28. 堂坂遺跡    | 34. 市脇遺跡   | 40. 原遺跡  |
| 5. 野田遺跡    | 11. 井辺遺跡   | 17. 滝ヶ峰遺跡 | 23. 宇田森遺跡 | 29. 船岡山遺跡   | 35. 垂井遺跡   | 41. 宮滝遺跡 |
| 6. 尾中遺跡    | 12. 神前遺跡   | 18. 亀川遺跡  | 24. 吉田遺跡  | 30. 萩原遺跡    | 36. 血縄遺跡   | 42. 橋谷遺跡 |

遺構名称	規 模	出土遺物(概数)	時 期	備 考
SK 165	長軸0.9m 短軸0.65m 深さ0.25m	壺1 高杯脚部2	弥生時代後期	遺物は倒立
SK 175	◇ 3.0m ◇ 1.7m ◇ 0.6m	弥生土器		
SK 178	◇ 1.65m ◇ 0.9m ◇ 0.2m			
SK 183	一辺3.6m 幅 0.8m ◇ 0.4m	弥生土器		方形周溝状
SK 184	直径7.2m ◇ 0.5m	なし		
SK 189	長軸4.1m 短軸1.4m 深さ0.8m	底部1	弥生時代後期	S × (?)
SK 196	◇ 4.2m ◇ 1.2m ◇ 0.35m			
SK 214	◇ 1.7m ◇ 1.2m ◇ 0.1m	(焼土)		
SK 220	◇ 1.2m ◇ 0.4m ◇ 0.1m	(◇)		
SK 228	◇ 2.7m ◇ 0.8m ◇ 0.3m	弥生土器		
SK 234	◇ 2.5m ◇ 1.6m ◇ 0.3m	壺1	弥生時代後期	S × (?)
SK 235	◇ 1.3m ◇ 1.25m ◇ 0.25m	壺1 ミニチュア2		
SK 236	◇ 3.1m ◇ 2.2m ◇ 0.2m	弥生土器		
SK 514	◇ 1.7m ◇ 0.7m ◇ 0.2m	◇		
SK 536	◇ 3.0m ◇ 1.9m ◇ 1.0m	◇		S × (?)
SK 548	◇ 1.6m ◇ 1.4m ◇ 0.25m	◇		
SK 554	◇ 1.8m ◇ 0.8m ◇ 0.2m	志1		
SD 11	長さ20.0m 幅 0.3m 深さ0.1m			
SK 197	長軸4.8m 短軸1.8m ◇ 0.15m	(焼土 炭化材)	中世	
SK 198	◇ 6.6m ◇ 2.0m ◇ 0.2m	(◇ ◇)	◇	
SK 219	◇ 4.2m ◇ 1.7m ◇ 0.25m	(◇ ◇)	◇	
SK 225	◇ 3.0m ◇ 2.4m ◇ 0.2m	(小礫)		
SK221~223	◇ 1.0m ◇ 0.5m ◇ 0.3m	(◇)		
SK 535	◇ 2.1m ◇ 2.0m ◇ 0.4m	(焼土)		
SK 543	◇ 5.0m ◇ 2.7m ◇ 0.3m	(焼土・炭化材)	中世	
SK 544	◇ 3.6m ◇ 1.7m ◇ 0.35m	(◇ ◇ 瓦器碗1)	◇	
SK 546	直径0.9m ◇ 0.55m	(焼土)		柱穴(?)
SK 549	長軸1.1m 短軸0.7m ◇ 0.65m	瓦質小皿約20		◇
ピット 1群	東西2間×南北3間(4.6×6.0m)	2間×2間(4.0×4.0m)	中世	掘立柱建物跡
ピット 2群				
◇ 3群	東北8m 南北5m			└字状 SA(?)
◇ 4群	長さ11.6m			┌字状 SA(?)
◇ 5群	東西2間×南北3間(3.2×3.6m)	3間×3間(4.0×3.6m)		掘立柱建物跡
◇ 6群	◇ 2間× ◇ 3間(3.6×6.0m)		中世	◇
◇ 7群	◇ 2間× ◇ 2間(4.6×3.6m)			◇
◇ 8群	◇ 2間× ◇ 1間(6.2×3.0m)			◇

S B (住居跡)    S K (土壇)    S X (土壇墓)    S D (溝)    S A (柵列)

第Ⅳ・Ⅴ区上面主要遺構一覧表





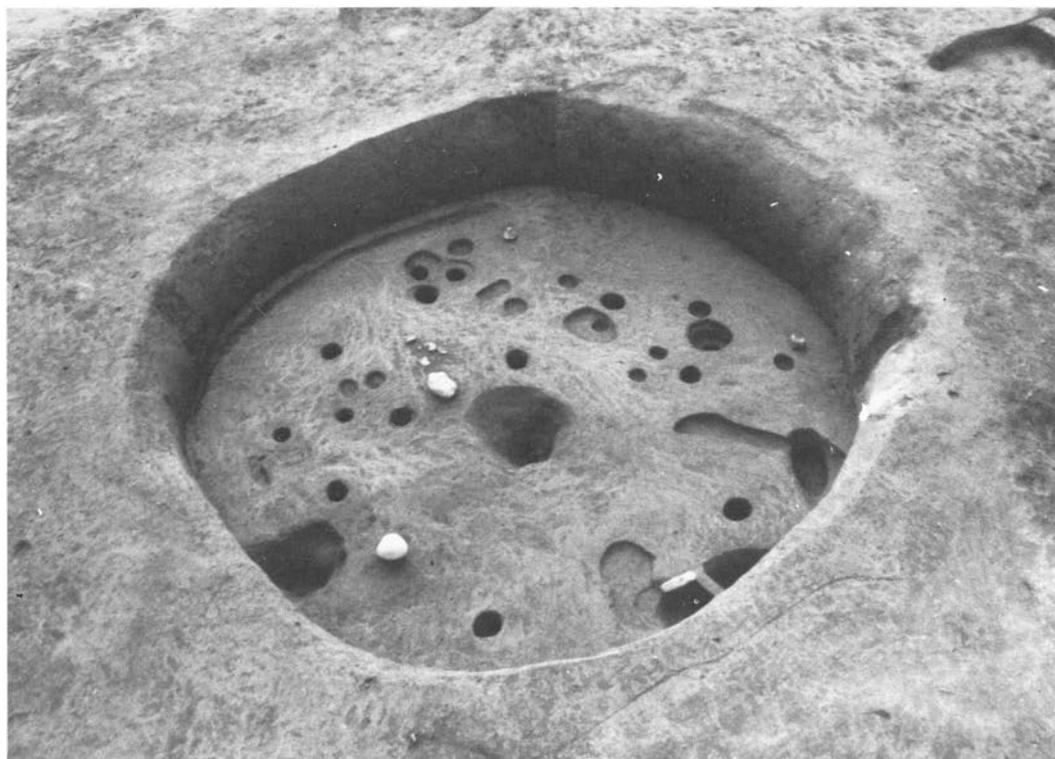
第IV・V区下面 主要遺構一覧表

遺構名称	規模	出土遺物	時期	備考
SB 07	直径 6.1m	壁高 0.6-0.9m	高杯4	弥生時代後期
SB 08	長径 6.8m 短径 6.5m	壁高 0.5-0.9m		
SB 09	※ 9.1m ※ 8.5m	※ 0.5-0.6m	甕3、高杯9、ミニチュア1、砥石2	覆土より紡錘車20
SB 10	※ 6.8m ※ 6.2m	※ 0.5-0.6m	甕2、甕1、高杯1	
SB 11	直径 7.7m	※ 0.3-0.5m	甕2、甕2、高杯2、鉢2、勾玉1	SB 12より新
SB 12	長径 6.3m ※ 6.0m	※ 0.5-0.6m	底部1、鉄鏝1	
SB 13	南北 3.8m 東西 3.6m	※ 0.15m		柱穴4
SB 14	※ 5.4m ※ 5.5m	※ 0.1m		
SK 602	長軸 1.9m 短軸 0.92m	深さ 0.68m		
SK 603	※ 1.96m ※ 0.78m	※ 0.33m		
SK 604	※ 0.96m ※ 1.44m	※ 0.82-1.37m		不定形
SK 605	※ 2.16m ※ 1.42m	※ 1.08-1.25m		
SK 607	※ 1.72m ※ 0.76m	※ 0.55m		
SK 608	※ 1.70m ※ 0.96m	※ 0.1-0.43m	(焼土)	木根(?)
SK 622	※ 1.92m ※ 0.8m	※ 0.24m		
SK 624	※ 3.18m ※ 1.26m	※ 0.64m		
SK 627	※ 2.94m ※ 2.30m	※ 0.19m	(焼土)	
SK 629	※ 2.24m ※ 1.46m	※ 0.28m	弥生土器	
SK 631	※ 0.66m	※ 0.32m		
SK 632	※ 2.52m ※ 0.74m	※ 0.18m		
SK 633	※ 1.52m	※ 0.64m		
SK 634	※ 3.84m ※ 0.68m	※ 0.08m	甕2	
SK 635	※ 3.10m ※ 0.86m	※ 0.3m	弥生土器	
SD 21	延長 4.36m 幅 0.86m	深さ 0.01-0.49m		
SD 25	長さ 0.98m ※ 0.46m	※ 0.01-0.05m		SBと時期差有り
SD 27	※ 0.80m	※ 0.04-0.07m		
掘立柱建物	東西 3.7m 南北 3.4m (2間×2間)		弥生土器	弥生時代後期 SBと同時期
SD 6	延長 8.0m 幅 0.9m	深さ 0.8-1.1m	弥生土器・鉢1、叩き石1	弥生時代後期 SB09に付属

第12図 第IV・V区下面遺構全体図



(1) 全 景 (南岸より)



(2) SB07 遺物出土状況 (東より)



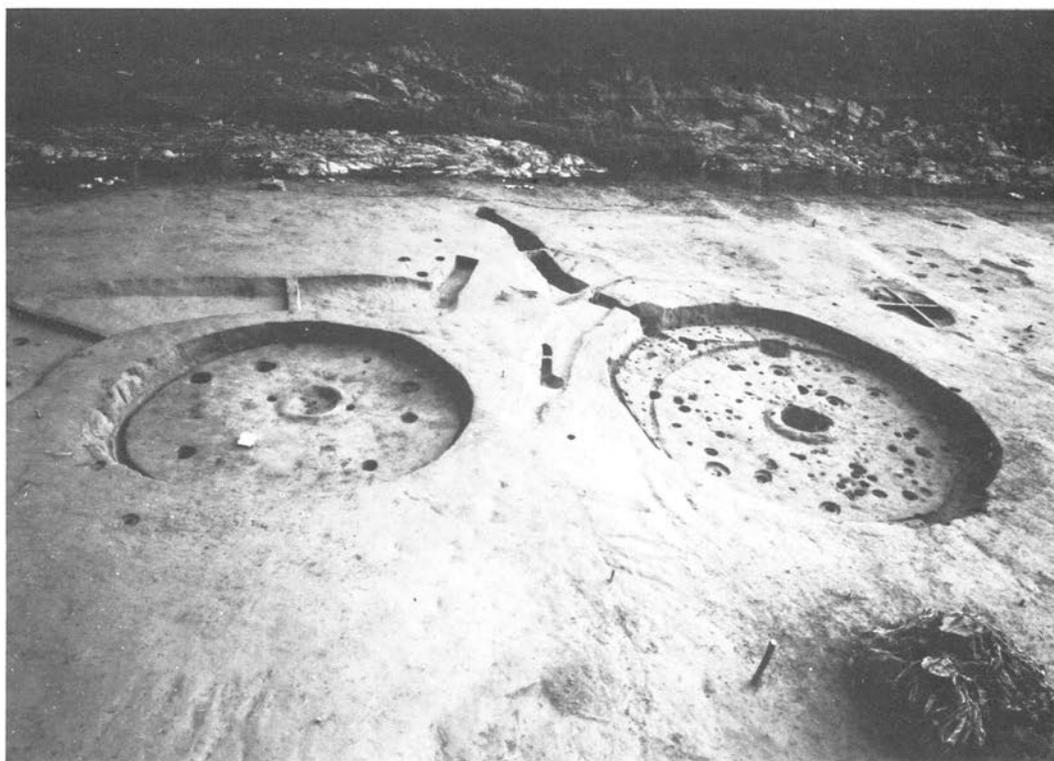
(1) SB08 遺物出土状況 (南より)



(2) SB09 遺物出土状況 (南より)



(1) SB09 完掘状況 (北西より)

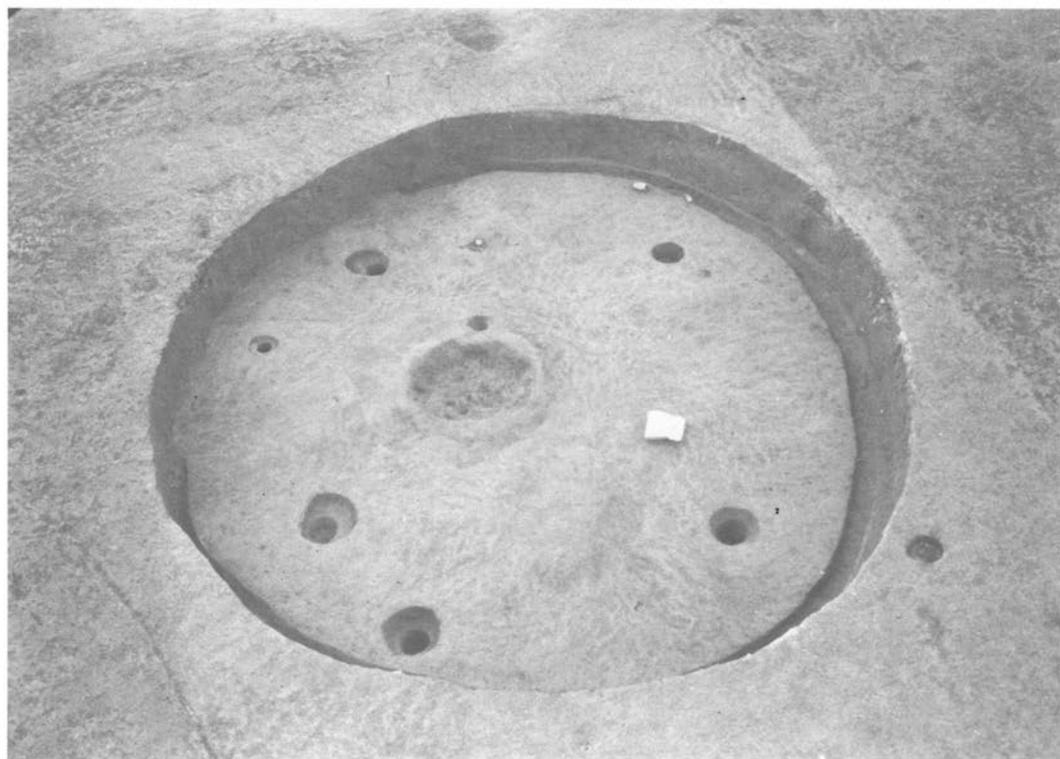


(2) SB09、SB10 完掘状況 (北より)



(1) ② SB09 遺物出土状況 (土器16)  
③ SD6 覆土堆積状況

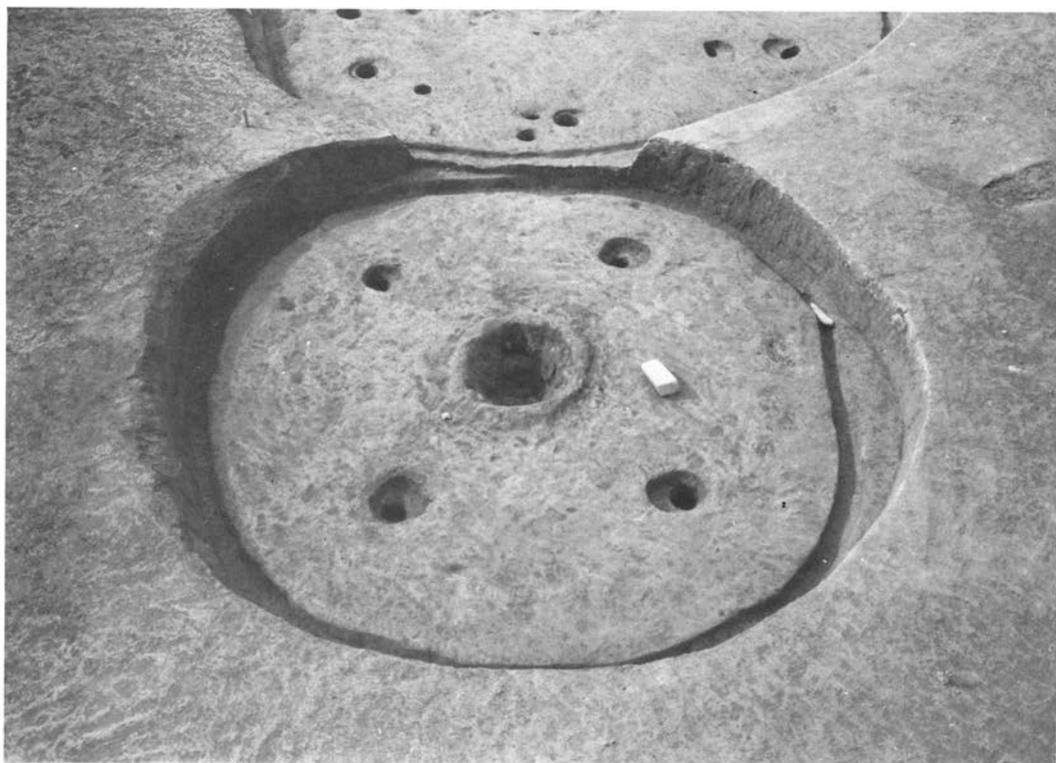
② SB09 遺物出土状況  
④ SB10 〃 〃 (土器7)



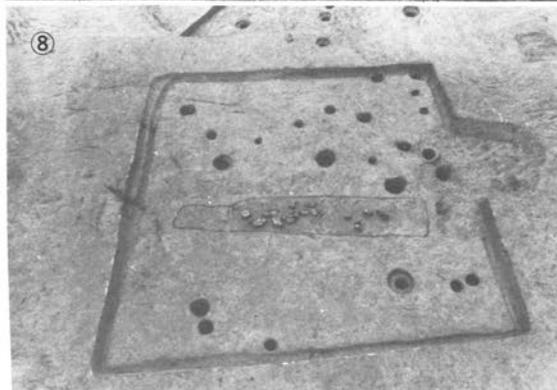
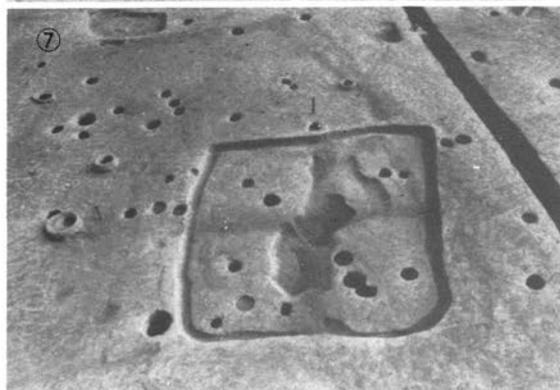
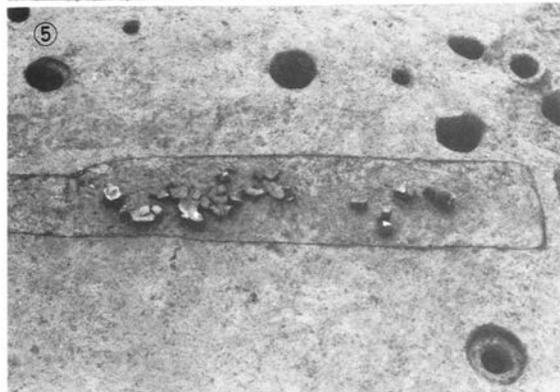
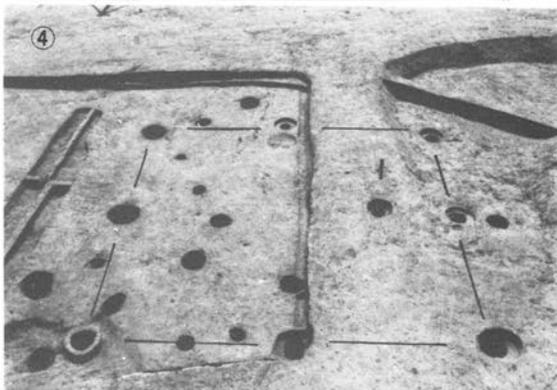
(2) SB10 遺物出土状況 (東より)



(1) SB11 遺物出土状況（東より）



(2) SB12 遺物出土状況（東より）



② SB09 炉 完掘状況

② SB09 pit 9

③ SB05 完掘状況

④ 掘立柱建物跡

⑤ SK 634

⑥ SK 634

⑦ SB 13

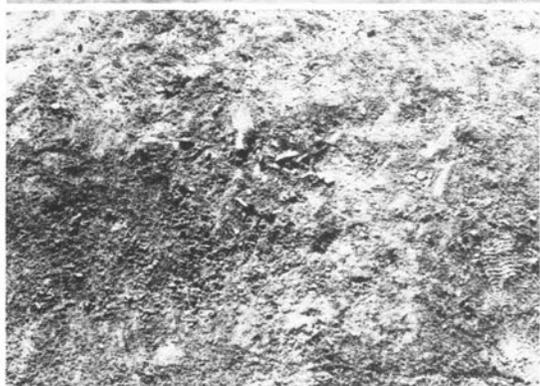
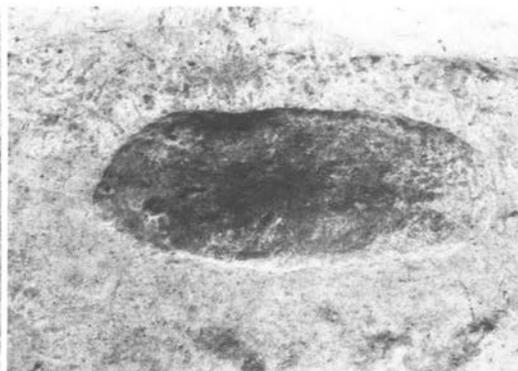
⑧ SB 14



(1) 全 景 (南岸より)

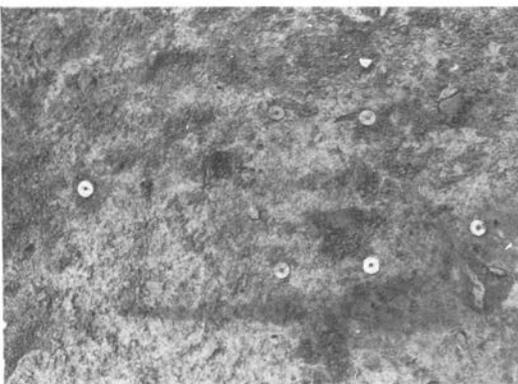


(2) 落込み状地形遺物出土状況 (SB09上部落込み)



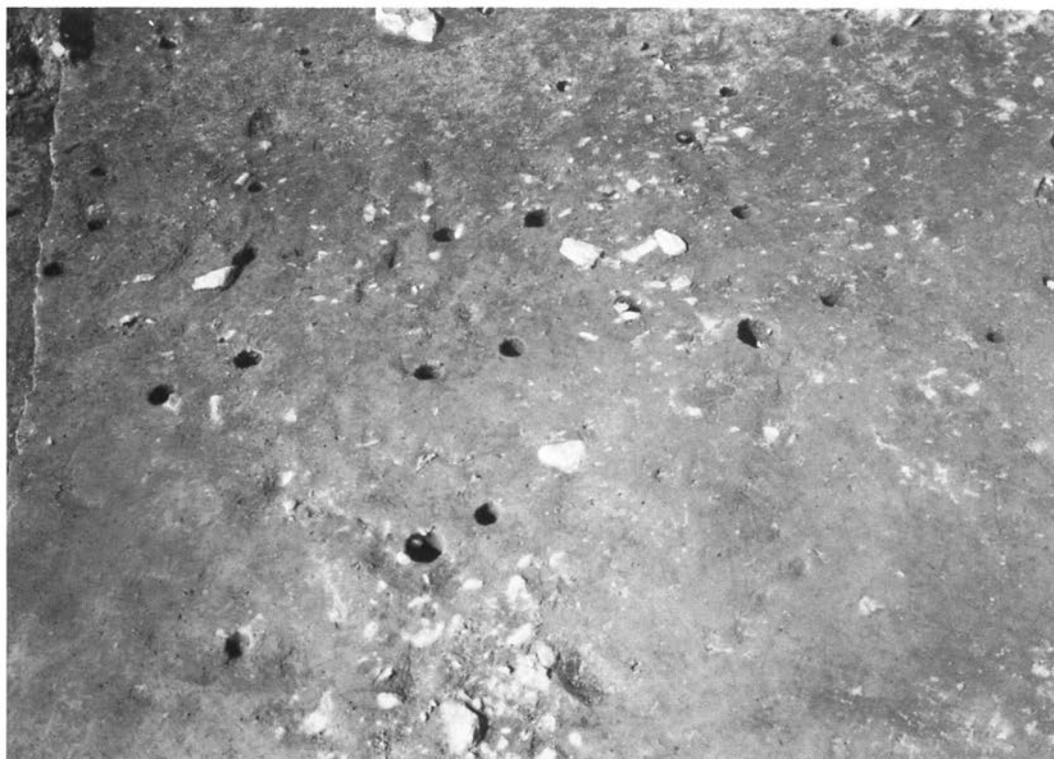
(1) ① SK543 炭層検出状況  
③ SK544 炭化材検出状況

② SK544 炭層検出状況  
④ SK544 完掘状況

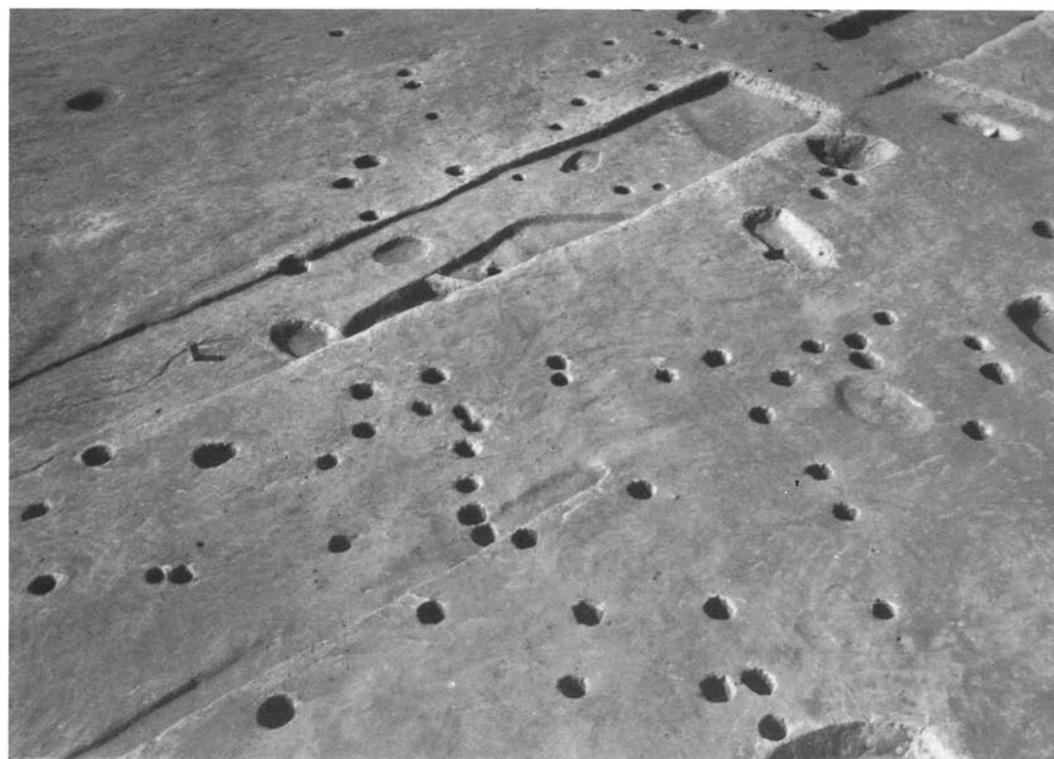


(2) ① SK197、198  
③ 南岸試掘 西区全景

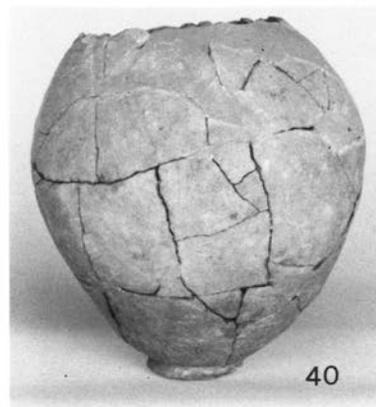
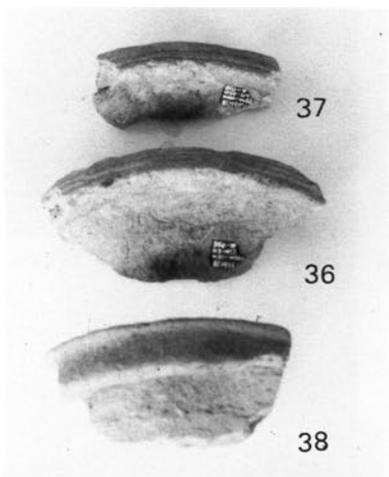
② 古銭出土状況  
④ 南岸試掘 東区全景



(1) ピット群1 (南より)

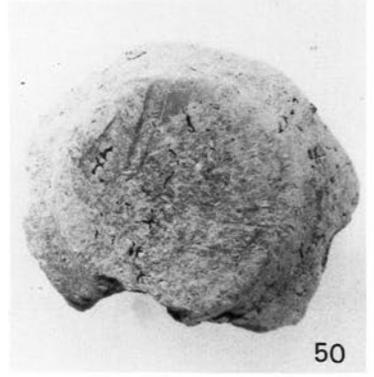
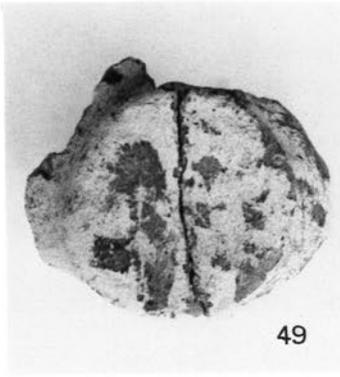
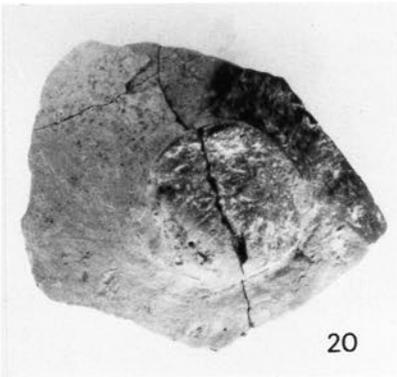
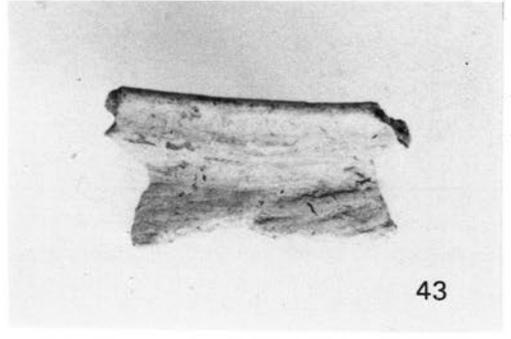
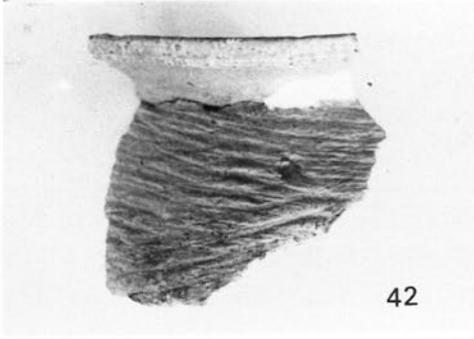


(2) ピット群5 (南東より)

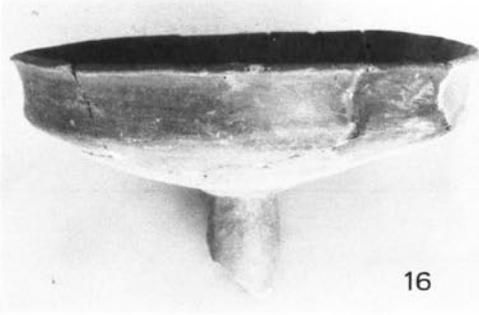


出土遺物

1-SK165 5-SB10 41-SB10覆土 14-SB09 35-黄色弱粘質土  
 36.38-淡黄褐色弱粘質土 37-淡黄褐色粘質土 39-明黄色弱粘質土  
 40-黑褐色小礫混入土



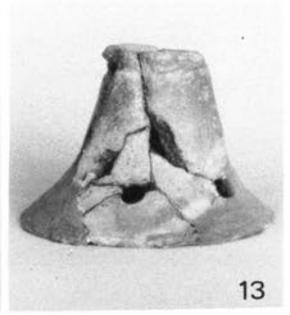
出土遺物 20-S B09 45-S B09覆土 7-S B10 52-S B10覆土 42, 49-淡黄褐色弱粘質土  
43, 44, 50-黒褐色小礫混入土 51-S D 6 覆土



16



11



13



10



9



3



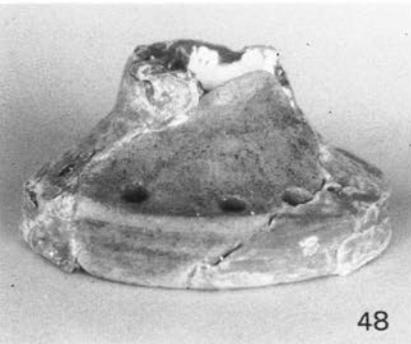
12



2



15



48



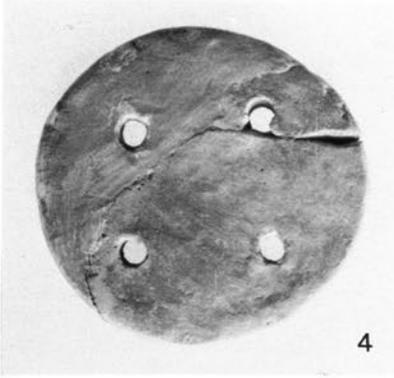
67



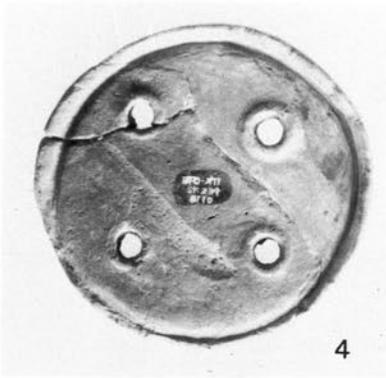
68

出土遺物

2. 3-S K165 9~13-S B07 15.16-S B09  
48. 67. 68-淡黄褐色弱粘質土



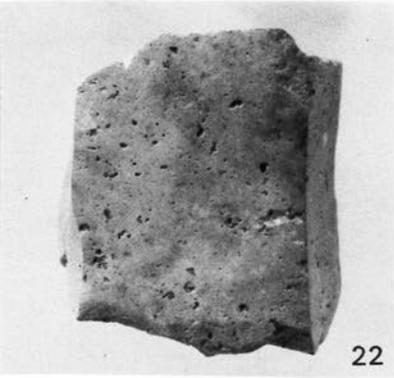
4



4



23



22



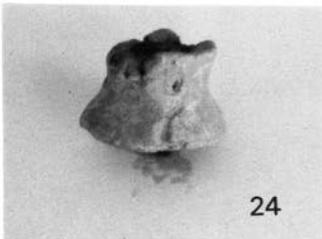
22



26



27



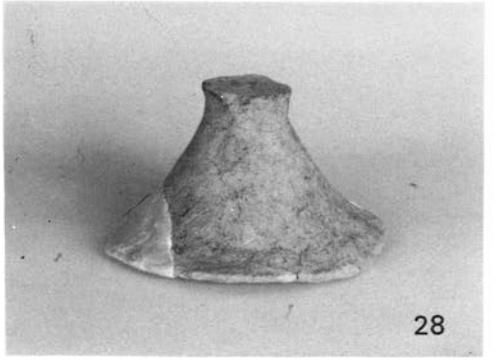
24



25



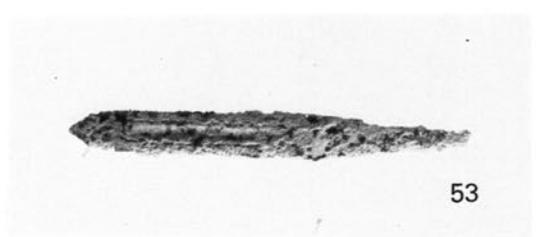
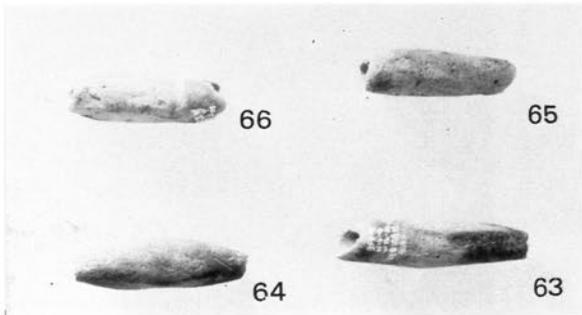
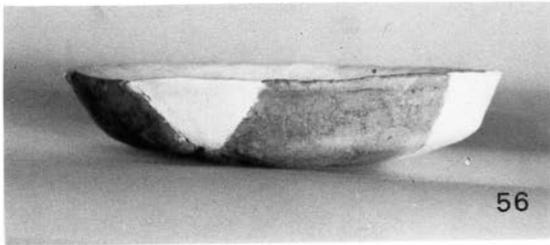
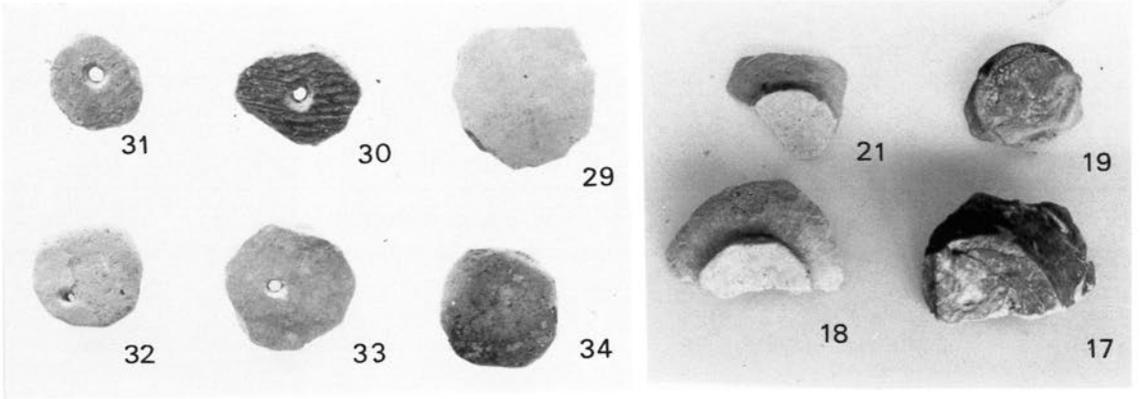
46



28

出土遺物

4-SK232 22.24-SB09 25-SK235 28-SB10覆土  
23-淡灰黄褐色弱粘質土 26.27-黄色弱砂質土 46-SD6覆土



出土遺物

29~31—S D 6 覆土 32—S B 09中央炉覆土 33—S B 09覆土  
 34—S B 09壁溝覆土 17~19. 21—S B 09 54~56—黒色弱粘質土  
 57~59—S K 549 53. 63~66—淡黄褐色弱粘質土

船岡山遺跡発掘調査概要 Ⅲ

昭和 57 年 3 月

発行 和歌山県教育委員会

印刷 邦上印刷